

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370654

研究課題名(和文) コーパスに基づく時制、相、態、助動詞の研究とその英語教育への応用

研究課題名(英文) A corpus-based study of English tense, aspect, voice, and modals for pedagogical purposes

研究代表者

藤本 和子 (FUJIMOTO, Kazuko)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：20350499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ESL/EFL学習者にとって習得が困難とされる時制、相、態、助動詞について、日本人英語学習者コーパス、教科書コーパス及び母語話者大規模コーパスデータの分析を行った。コーパスデータ分析結果から、これらの文法事項の日本人英語学習者の使用傾向をつかみ、時制、相、態、助動詞について学習者に何を指導すれば、学習者の習得を助け、コミュニケーションにおいて、時制、相、態、助動詞を効果的に使用することができるのかについて考察した。さらに、学習者の英語習得に影響を与える中学校、高等学校の英語教科書を分析した。これらの結果をもとに、時制、相、態、助動詞の指導内容及び教科書記述の改善案を提示した。

研究成果の概要(英文)：Our corpus search has found Japanese students' tendencies in their use of English tenses, aspect, active and passive voice, and modals by analysing and comparing Japanese learners' corpora, textbook and teaching material corpora, and native speakers' corpora. Based on the corpus findings, we discussed what to teach about the grammatical items in classrooms in order to help students to acquire their use and have effective communication in daily lives. We also suggested improvement in teaching contents of the grammatical items and development of English textbooks reflecting real English usage.

研究分野：英語学、英語教育

キーワード：学習者コーパス 言語教育のための英文法 時制 相 態 助動詞 教材分析 英文法指導

1. 研究開始当初の背景

母語話者コーパスを使用した語彙・文法研究や、学習者コーパスを利用した学習者の英語使用傾向に関する研究が盛んに行われているが、コーパス基盤型文法研究の英語教育への応用はまだ十分にされていない。学習者が、習得しにくく、適切に使用できない文法事項である時制、相、態、助動詞について、なぜ学習者が困難を感じるのか、その理由を把握し、何を学習者に指導すべきかについて提案することは、学習者がより実践的で効果的なコミュニケーションを図ることができるようになるために必要不可欠なことである。学習者が時制、相、態、助動詞を適切に使用できない背景には、指導内容に改善の余地があることも考えられる。指導内容改善の提案には、学習者の英語習得に大きな役割を担う英語教科書の分析調査も必要である。教科書の記述には、教科書編集者の直観が反映され、言語事実が必ずしも反映されているとはいえないという指摘もなされてきた。本研究で得られたコーパス分析結果やこれまでの英語学やコーパス基盤型研究の知見が、教科書の指導内容や記述に反映されているか検証し、教科書の改善点を提示することにより、学習者の時制、相、態、助動詞の習得を助け、すまますグローバル化が進む現代社会にあって、学習者の英語運用能力向上につなげてゆく必要性があると考えるに至った。

2. 研究の目的

英語の時制、相、態、助動詞は、文法事項の中でも、ESL/EFL 学習者にとって習得が難しく、誤りや不適切な使用が起りやすい。本研究では、日本人英語学習者コーパス、母語話者大規模コーパス、英語教科書・教材コーパスの比較分析結果及び主要なコーパス基盤型文法研究結果に基づき、1) 日本人英語学習者の時制、相、態、助動詞の使用傾向をつかみ、2) これらの文法事項について何を指導すべきかを考察し、3) 学習指導要領及び学習指導要領解説の記述に照らして、中学校、高等学校の英語教科書を分析し、改善点を提案する。これらのことから、実際のコミュニケーションにおける日本人英語学習者の英語運用能力向上のための示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究遂行のため、データ比較には、適切な統計分析が不可欠であることから、研究分担者として、統計学専門の岡山理科大学教授黒田正博氏が専門知識の提供、データ分析方法の助言、学習者データ分析を担当した。海外共同研究者として、英国ランカスター大学名誉教授 Geoffrey Leech 氏から英文法、コーパス言語学の専門知識の教示、研究方法助言、研究結果分析の協力を得た。2014 年の Geoffrey Leech 名誉教授逝去の後、英文法研究を専門とし、コーパス基盤型研究に詳しい

英国ランカスター大学 Senior Lecturer の Willem Hollmann 氏の研究協力を得た。

以下の方法で本研究を進めた。

(1) 日本人英語学習者の英語使用傾向を分析するために、研究代表者が平成 21、22 年、24 年度にかけてアカデミックライティングの授業で収集した、英語を専門分野として学ぶ日本人大学生 2 年生のライティングデータからコーパスを作成し、既存の大規模学習者及び大規模母語話者コーパスなどと比較分析調査をした。既存の学習者コーパスのみでなく、本研究で作成したコーパスを用いた理由は、従来の多くの単発データ回収による学習者コーパスと異なり、長期にわたる学習経過、学習者の属性や学習熟度、指導内容、ライティングのトピックなどを十分考慮に入れたデータ分析を行うためである。日本人大学生ライティングデータからのコーパス作成とともに、これらの学生が使用した ELT ライティングコースの教科書コーパスも作成した。教科書の英語使用と大学生の英語使用の関連性の調査に使用した。その他、日常の様々な言語使用場面に合わせた言語表現のうち、特に母語話者の助動詞の使用を調査するために、学習者用英英辞典から小規模であるが、コーパスを作成し分析した。

(2) 英語教育のための英文法の観点から、何を学習者に指導すべきかについて、これまでの英語学研究やコーパス基盤型文法研究の成果と第二言語習得理論に基づき検討した。

(3) 研究結果に基づき、指導内容と英語教科書の改善点を提案するために、中学校と高等学校の教科書の、時制、相、態、助動詞の扱いや記述を分析した。高等学校教科書は、必修科目であり、すべての文法事項を扱う「コミュニケーション英語」用の教科書を分析した。さらに、「コミュニケーション英語」用の教科書の 3 年間の全国教科書採択率の動向を参考にしながら、5 つの出版社の教科書からコーパスを作成した。この教科書コーパスは、教科書本文、文法まとめ、練習問題のサブコーパスを作成した。教科書コーパスと母語話者大規模コーパスの検索分析を行い、実際の現代英語の使用特徴が、教科書に反映されているかについて調査した。

4. 研究成果

(1) 英語圏で出版されている主要な文法書や辞典の記述が、実際の言語使用を反映していない場合がある。例えば、これまで、*used to* の否定形と疑問形をめぐっては様々な議論がなされているが、主要な文法書や辞典の間で記述に異なりがあることから、本研究において、イギリス英語とアメリカ英語の大規模母語話者コーパスを分析し、現代英語における否定形と疑問形の使用頻度を調査した結果、より規範的な文法書、辞典と、より記述的なものがあることについて調査結果を

発表した。文法書や辞典から規範的な要素を全く取り去ることはできないが、文法家や辞典編集者の言語観のみではなく、コーパス基盤型研究から得られた言語事実の研究成果を文法書、辞典、教科書などの記述や英語指導に反映させていく必要があることについて発表を行った。

(2) 時制、相について、学習指導要領解説に取り上げられている文法形について、イギリス英語とアメリカ英語の母語話者コーパスを用い、それぞれの文法形の頻度を調査した。同時に、高等学校「コミュニケーション英語」教科書コーパス検索を行い、それらの文法形の頻度を母語話者コーパスにおける頻度と比較した。取り上げられている各文法形の頻度は、教科書5社により異なる。教科書コーパスと母語話者コーパスとの比較により、文法形の使用頻度に有意差が見られるものもあることが分かった。時制、相を表す文法形の指導には、それぞれの文法形が表す「時の概念」の分かりやすい指導と、それらの文法形が適切に使用される場合について指導が必要である。これらの研究結果について、今後発表してゆく予定である。

(3) 態については、従来の英文法研究において、単なる能動態と受動態の形態の違いの指導にとどまらず、両者について何が異なるのかを学習者が理解し、適切に使い分けができるように指導する必要性が述べられてきた。本研究では、能動態と受動態の違いについて、主語、by+行為者の使用頻度、受動態が使用されるレジスター（言語使用域）に注目をし、情報の流れ、結束性の観点を含め、中学校教科書と高等学校教科書「コミュニケーション英語」の記述や提示されている例文調査を行なった。その結果、従来指摘されてきた、能動態と受動態の単なる形態の書き換えや言い換えに重点を置く指導法は、中学校教科書ではほとんど見受けられない。しかしながら、コーパス基盤型研究の成果である by+行為者の使用頻度情報や、レジスターにおける使用頻度の違いやその理由についての記述はほとんど見受けられない。受動態の指導内容と学習者レベルの目安を得るべく、オックスフォード大学出版局から出版された ELT 文法書の CEFR に沿ったレベル別の指導内容を調査した。受動態は、中学校から大学までのカリキュラムの中で、初級学習者から上級学習者に渡って十分に指導がなされるべき文法事項であることを論文にまとめた。

(4) 助動詞については、日本人学習者データは、本研究で作成した日本人大学生コーパスを主に使用し、母語話者学習者コーパス、母語話者コーパスと比較した。ESL/EFL 英語学習者は、助動詞を適切に使用できないため、英語表現が、母語話者に直接的あるいは失礼

なものとして受け取られることがあるとされることから、本研究では、特に「可能性」と「予測」を表す助動詞の用法に焦点を絞り、日本人英語学習者の使用を調査した結果、母語話者との間に有意な差が見受けられた。また、TOEIC による大学生の学習レベルにより、これらの助動詞の使用に異なりが見られた。日本人大学生が使用したライティング教科書から作成した教科書コーパスとの比較からは、教科書の学習者の助動詞使用への影響が見られる。さらに、母語話者が、どのような言語使用場面で、どのような言語機能のために助動詞を用いているのかについて調査するために、学習者用英英辞典である *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 第 9 版 (2015) の用例から小規模ではあるが、データセットを作成し分析した。日常生活の様々な場面で、ポライトネスのためにも、「可能性」や「予測」を表す助動詞が効果的に使用されていることが分かった。その他、学問分野によって使用される助動詞の異なり方を調査するために、*Oxford Learner's Dictionary of Academic English* (2014) の記述分析に基づき、イギリス英語とアメリカ英語の大規模母語話者コーパスを用いて比較調査をした結果、人文・社会科学分野と自然科学分野で、助動詞の使用頻度が有意に異なることが分かった。これらの研究成果を学習指導要領、学習指導要領解説の記述に照らして、助動詞指導の重要性と指導内容の提案について学会、論文で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

藤本 和子 . (2016 掲載予定) . 「英語受動態の指導について」 創価大学英文学会 . 『英語英文学研究』 第 41 巻第 1 号 . 査読無 .

藤本 和子 . (2016) . 「*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 第 9 版の 'Express yourself' notes の分析と英語教育への活用」 創価大学英文学会 . 『英語英文学研究』 第 40 巻第 2 号 . pp. 51-72. 査読無 .
<http://libir.soka.ac.jp/dspace/>

藤本 和子 . (2015) . 「*Oxford Learner's Dictionary of Academic English* における tentativeness を表す助動詞の記述について」 創価大学英文学会 . 『英語英文学研究』 第 40 巻第 1 号 . pp. 53-66. 査読無 .
<http://libir.soka.ac.jp/dspace/>

藤本 和子 . (2013) . 「*Collins COBUILD English Grammar* 第 3 版に見る現代英語の文法の諸相」 創価大学英文学会 . 『英語英文学研究』 第 38 巻第 1 号 . pp.

75-88. 査読無 .
<http://libir.soka.ac.jp/dspace/>

Fujimoto, K. (2013). "The Negative and Question Forms of *Used to* in Present-day English." *ICAME Journal* 37, UCREL, School of Computing and Communications, Lancaster University, pp. 107-118. 査読有 .
http://clu.uni.no/icame/ij37/Pages_107-118.pdf

[学会発表](計2件)

Fujimoto, K. "Learners' Use of Modal Verbs with the Extrinsic Meanings 'Possibility' and 'Prediction'." The 8th International Corpus Linguistics Conference. 2015年7月21日 Lancaster University, UK.

Fujimoto, K. "Corpus Frequency or the Preference of Dictionary Editors?: the Negative and Question Forms of *Used to*." The 7th International Corpus Linguistics Conference. 2013年7月23日 Lancaster University, UK.

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤本 和子 (FUJIMOTO, Kazuko)
創価大学・文学部・教授
研究者番号：20350499

(2)研究分担者

黒田 正博 (KURODA, Masahiro)
岡山理科大学・総合情報学部・教授
研究者番号：90279042